横浜市史資料室　City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

市史通信

【目次】
●開館後の横浜市市民博物館
●日本愛妻会と横浜ペンクラブ②
●関東大震災と横浜市役所
●横浜開港一五〇周年関連出版物紹介
●市史資料室たより

横浜市会事務局の看板を掲げる旧横浜市市民博物館　1940年代後半　赤尾彦作資料
下段の中央右が石河京市、左が赤尾彦作。他に平沼亮三、小沢二郎、田上松衛、小杉芳蔵ら。

第5号
【発行日】2009年7月31日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
gy-sisi@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.jp/me/gyousei/housei/sisi/

開館後の横浜市市民博物館

横浜市市民博物館は、図書館（現西区老松町）に隣接して造られた震災記念館をリニューアルして一九四二年九月に開館し、四四年一一月に観覧事業を中止した、僅か二年強のみ存在した博物館である。開館までを第三号で扱ったので、開館後について紹介する。

一、市民博物館の開館式

市民博物館は、当初の予定通り一九四二年九月一日に開館した。その前日、八月三一日には、休館日の図書館閲覧室を使って開館式が行われた。

式には、文部大臣代理文化施設課長、日本博物館協会会長荒木貞夫、神奈川県知事、市会議長など官民約四〇〇人が出席した。そのなかで、祝辞や事業報告の外、「横浜建設の大恩人」物故七人の顕彰がおこなわれた（『横浜市開拓功労者（土木埋立事業関係）顕彰状並事績略列伝』）。顕彰されたのは、吉田勘兵衛（吉田新田干拓）・太田徳五郎（太田屋新田埋立）・高島嘉右衛門（高島町埋立）・平沼九兵衛（平沼新田埋立）・岡野良親（岡野新田干拓）・伏島近蔵（新吉田川、新富士見川開鑿）・山川吉左衛門（磯子隧道開鑿、根岸堀割川浚渫）の七人で、「本市草創ノ時代土地ノ開発事業ニ率先尽瘁シ以テ本市興隆ノ礎ヲ築キタル」功績によるものであった。この顕彰事業は、「文化、貿易、産業方面等ノ功労者ハ年々博物館ノ事業ノ一トシテ顕彰セバ可ナラン」という横浜史料調査委員会の意見により行われた（八月二一日発議「本市開拓者顕彰ノ件」、各課七九所収）。これらの人々については、神奈川新聞紙上で「ハマ先覚者の偉業を偲ぶ」と題して、八月二八日から九月二日まで六回にわたって（最終回は二人分）紹介されている。

二、開館時の展示内容

開館時の展示内容は、直前の八月に出された『陳列品目録』により、「印刷後多少の変更があった」が、概ね判明する。その概略を表1で見ると、展示は四部構成に特別室の皇室関係資料があり、開館記念として「大東亜戦」関係の資料を展示する。

第1部「横浜発達史概観」では、化石・石器から横浜村の文書・絵図等々を展示する第1室、大震災関連を展示する第2・3室・別館、灯火管制や焼夷弾など防火・防空関係を展示する第4室に分かれる。規模は小さくなっているが、従来の震災記念館の展示の継承といえよう。なお、震災記念館では、一九三三年に爆弾の模型・投下図など約七〇点を展示した防空室を設けていた（『東京朝日』三三年九月一〇日）。

第2部「横浜文化の精粋」では、主に開港から明治初期の資料を展示する。ここには開港場や鉄道・郵便などの浮世絵などや、いわゆる「はじめて

ものがたり」の絵や資料なども展示され、震災記念館の展示からは拡張された。

第3部「文化振興資料」では、船舶港湾・空港航空・大東亜関係資料を展示する。船舶関係では「日本海洋発展絵巻」として、「海原之御神素盞嗚尊之図」などをパネル展示し、また、船舶模型なども展示する。航空関係では、敵機に関する資料として米英の爆撃機・戦闘機の写真を展示し、また、「未来の水上空港模型」や「空港より」として、現在の磯子区鳳町に造られた飛行艇空港関係の展示もあった。大東亜関係では、「共栄圏」各国の風景や資源などをジオラマ等で展示していた。

第4部「市勢関係資料」では、横浜市の貿易・行財政の図表や真葛焼・鍍金ダマシンなどの地場産業品、また、水道・瓦斯・電気の各局資料や農業関係のジオラマ等も展示された。

特別室の皇室関係では、明治天皇と昭和天皇の行幸に関連する品々等が展示された。以上が常設の展示であった。

開館記念としては、「大東亜戦関係資料」が展示された。同展示では、海軍省や海軍横須賀鎮守府から借用した米兵の軍服などの「戦利品」などがあった。また、一九四二年五月に長崎湾外で触雷、沈没した長崎丸の船長菅源三郎（事故の後始末後、自殺）関係の遺品等も展示予定となっていた。しかし、各新聞では、開館記念展示についてはほとんど触れられていない。

展示「近代式陸軍調練の始め」

展示「日本海洋発展絵巻」

表1　開館時の展示予定

展示内容
第１部　横浜発達史概観
第１室　横浜の発祥と発展（太古より開港まで）
有史以前／石器時代遺物／横浜村時代
第２室　大震災ジオラマ（大正十二年九月一日の実況）
第３室　大震災資料及復興資料
（附）別館　大震災関係資料
第４室　都市防衛（防火と防空）
第２部　横浜文化の精粋
第１室　開港関係資料
第２室　明治文化資料
近代文化発祥の室
第３部　文化振興資料
第１室　船舶港湾資料
艦船の発達に関する資料／艦隊之種類及構造に関する資料／船舶関係参考資料／港湾に関する資料／航路標識に関する資料
第２室　空港航空資料
未来の水上空港模型／空港より／敵機に関する資料／航空原理に関する資料／模型資料
第３室　大東亜関係資料
大東亜戦関係資料（開館記念陳列）
海軍省特別出品
戦利品の部／其の他の部
横須賀鎮守府特別出品
帝国図書館特別出品船舶資料
東亜海運株式会社特別出品
長崎丸故菅船長遺書遺品其他関係資料
第４部　市勢関係資料
1. 貿易関係資料
2. 行財政資料
3. 工芸商品資料
4. 文化施設資料
横浜市水道局関係資料／瓦斯局関係資料／電気局関係資料／農事関係資料
特別室　皇室関係資料

出典：横浜市市民博物館『陳列品目録』（1942年8月）。

三、企画展示の内容

市民博物館では、常設展示の他に、表2に示した六回の企画展示が行われた（開館展示を除く）。戦争中なので直接的に戦争・戦時に直結した展示と、歴史・文化に関する展示を行っている。

①大東亜戦一周年記念資料特別展覧会

一九四一年一二月八日の開戦から一周年を記念して、「赫々タル戦果並ニ国内決戦態勢ヲ展示シ市民精神ノ昂揚ニ資セン」ことを目的に企画された。

予定では、初日から一週間は入館料が無料に設定され、「二階現代部室及別館」が会場とされた。「現代部室」とは、第3・4部の全部と思われる。

内容は、「宣戦詔書の大額」、「軍神資料」、「最高軍司令官資料」、「代表的戦闘資料（絵画、写真、地図、記録）」、「戦利品陳列」、「占領地資料」、「大東亜共栄圏建設構想」、「国内決戦体制資料」、「海外諸国ノ状況」であった。

展示資料のうち写真は、新聞社に協力を求めており、例えば、朝日新聞東京本社からは一一六枚の写真を借用している（一一月二五日「借用書」、各課二七四所収）。また、「戦利品」は海軍・陸軍から借用しており、機関銃類や押収被服などのほか、高射機関砲や小型戦車などもあった。高射機関砲は陸軍兵器補給廠から貨物自動車で牽引し、小型戦車は第四技術研究所の手により輸送された（費用は市の負担）。「軍神資料」としては「感涙新た〝軍神遺愛の双眼鏡〟」（『朝日』四二年一二月五日）と報道された「加藤隼戦闘隊」の加藤健夫の遺品などが展示された。その他に山本五十六の書などもあった。

②勤皇志士遺墨遺品展覧会

一九四三年二月一日から「大東亜戦下第二回ノ紀元節ヲ迎フルニ際シ我国体ノ尊厳ヲ深ク認識シ国民ノ指導ニ実践ニ心魂ヲ傾ケシ勤王諸志士ノ遺品遺墨ヲ蒐集展示シ以テ市民ノ愛国心ヲ一層振起シ必勝ノ覚悟ヲ強固ニセシメン」ことを目的とし、会場は前展示で使用した二階全部であった（四三年一月四日決裁「勤王志士遺墨展覧会開催

ノ件」、各課二七四所収）。

その内容は、「水戸光圀諸書品」、「日本外史原稿」、「藤田東湖其他水戸烈士関係遺品遺墨」、「其他全国著名志士ノ遺墨並ニ人物解説」、「志士ト横浜関係史実」、「愛国百人一首ノ解説並ニ歌手人物伝」等で、徳川光圀・徳川斉昭・藤田幽谷・藤田東湖・会沢正志等の水戸関係が遺墨では大半を占め、蒲生君平・高山彦九郎・林子平・梁川星巌等の遺墨や高山彦九郎の遺髪、高島秋帆愛用のピストル等、二百数十点の資料を二期にわけて展示する予定となっていた（『神奈川』一月二〇日、『毎日』一月三一日等）。そのなかには、佐々介三郎書・浅見絅斎手簡・山県大弐書など「初めて世間に出る逸品」と報道されるものもあった。

表2　横浜市市民博物館の企画展示

開催期間	タイトル	備　　考
1942. 9. 1 ～　　？	開館記念特別展示	海軍省特別出品「戦利品」等
1942.12. 5 ～ 1943. 1.20	大東亜戦争一周年記念資料特別展覧会	「軍神」資料、「戦利品」等
1943. 2. 1 ～ 1943. 4.20	勤皇志士遺墨展覧会	水戸光圀・藤田東湖の遺墨など。当初3月20日予定。
1943. 5.10 ～ 1943. 7.30	日本燈火展覧会	燧石、行燈、ガス燈など
1943. 9. 1 ～ 1943.11.30	三大先覚者事歴顕彰展覧会	二宮尊徳・池上幸豊・高島嘉右衛門の事蹟
1944. 4. 1 ～ 1944. 6.30	日本の旗及武具武器展覧会	旗幟・甲冑・弓箭
1944. 9. 1 ～ 1944.10.31 ？	非常時衣食展覧会	

出典：『横浜市事務報告書』各年、新聞記事等より作成。

展示に付随して講演会も行われた。二月二〇日に朝日新聞横浜支局内の講堂において、「勤皇志士追慕講演会」として、渡辺金造「高山正之を語る」と雑賀博愛「勤皇志士と七卿西竄」の講演が行われている。

また、この展示のための調査により、館長中道等と嘱託弦間冬樹によって、一時期、現栄区上郷町に居住し、天狗党の乱に参加したとされる平尾桃岩齋の「墓」（供養塔）が確認されている（各紙一月二六日）。

この展覧会は、当初、三月二〇日までの予定であったが、数度の掛け替えを行ったが未展示の貴重な資料が多数あり、また、季節柄、入場者が見込めることから一か月延長され、四月二〇日までとなった（三月二〇日決裁「勤皇志士遺墨遺品展覧会会期延長ノ件伺」、各課二七四所収）。

③日本燈火器展覧会

四三年五月一〇日から開催され、「我国燈火利用ノ変遷ヲ器具ヲ中心ニ展示シソノ発達過程ヲ文化史的ニ回顧スト共ニソノ科学的性能特質ヲ解説シ以テ市民ノ燈火同器具ニ関スル科学的知識ヲ再認セシメ発明心ノ振起ト日常生活ニ於ケル利用活用ノ工夫ヲ促進セシメン」との目的によって企画された（四月一九日発議「日本燈火展覧会開催ノ件」、各課二七四所収）。また、時代の要請で「空襲ニ因ル災害非常ノ際ニ於ケル万全ノ処置ニ関シ市民ノ関心ヲ喚起スルタメ」ともされた（『昭和十八年事務報告書』）。展示は、燈火源（燃料等）と燈火器具を年代順に並べたものが主で、「群馬県新田郡寶泉古墳から発掘された火打石を腰にしてた埴輪」（『神奈川』五月一〇日）から、現代における電球・ネオン・太陽灯までを展示し、また、火に関する信仰・民俗・風習などの資料も展示された。これらの資料は、市内では近藤栄太郎等、市外では帝室博物館・東京帝大理学部人類学教室・マツダ照明学校等から借用予定となっていた。

この他に、講演会も行われた。資料の借用先でもある杉山壽榮男「燈火法ヨリ見タル日本上代ノ文化」と、和田千吉「日本燈火器ノ種々相」が演題であった（『昭和十八年事務報告書』）。

④三大先覚者事歴顕彰展覧会

四三年九月一日から開催された。ここでいう三大先覚者とは、報徳仕法の二宮尊徳、幕末維新期に高島町の埋立や瓦斯事業など近代横浜の基礎を築いた高島嘉右衛門、江戸時代に川崎市域で新田開発や砂糖生産を行った池上幸豊の三人を指す。

このうち、池上については、館長中道等が一九三五年から川崎市史編纂に関わり、また『池上幸豊小伝』（池上文庫、一九四〇年）や『池上家文書』（池上文庫、一九四〇～四一年）の校訂・編集を行うなどの専門家であった。

展示「池上幸豊の像」
（『三大先覚者事歴顕彰展覧会出陳目録』）

展示の内容は、二宮尊徳関係では、事蹟として一家再興、小田原藩家老服部家復興、藩政につき献策、仕法、治水事業、救済・教化事業等が展示され、そのほか、使用の行燈、風呂敷、肖像、全説話、報徳問答、報徳訓などが展示された。池上幸豊関係では、海中新田開発事業・砂糖製造・芒硝薬用塩、食塩製造・植物栽培と普及・天災に罹りし地方百姓救済の事蹟を展示し、他に幸豊の行状記、遺愛の具足、同道中差、愛用の硯と文鎮、砂糖製造の釜、甘蔗しぼり等が展示された。高島嘉右衛門関係では、高島学校創立・横浜箱舘定期航路創定・高島町堰（鉄道敷地に献納）入舟町埋立・我国最初の瓦斯製造、瓦斯燈建設・炭坑等の経営・洋灰製造・北海道開拓・下水道創設建言実施等の事蹟を展示し、その他、高島易断五帖、高島町埋立当時の革羽織、宮内省の叙位、勲章等を展示した（以上、『神奈川』

八月三一日）。

その他に、古屋安定（報恩会講師）「教育上ヨリ見タル二宮先生」・葛野重雄（市視学）「二宮教育序説」・早川茂一（報恩会副会長）「二宮先生ノ翼賛精神」・加藤仁平（文理科大教授）「時局要請ト報徳」の講演会が行われた（『昭和十八年事務報告書』）。

⑤日本ノ旗及武具武器展覧会

一九四四年四月より「古来ノ旗幟、甲冑及弓箭其他ヲ陳列シ、日本武士道精神ノ鼓吹ト古戦場裡ノ追想ニ資センガタメ」に開催された。合わせて、四月二五日には講演会が、五月一八日には鎧着用次第実演が行われた（『昭和十九年横浜市事務報告書』）。

⑥非常時衣食展覧会

同年九月より「戦時下衣食生活ノ適正化ヲ図ルタメ」「飢饉其他非常ノ際案出セル簡便有数ナル諸資料」を展示して行われた。資料は、東北、北海道の各帝国大学などから提供を受けた（『昭和十九年横浜市事務報告書』）。

⑦その他

金属回収に供出した井伊直弼像をもとに、高さ約七六センチメートルほどの石膏像（清水青巌作）が作られた。一九四三年一二月二五日から陳列された。

四、入場者数・職員

表3により入場者数を見ると、開館した九月は、一日平均九七四人と非常に多く、動員もあったかもしれないが、市民の関心が高かったようである。その後の二ヶ月も三〇〇人台を保っている。次の一年間は、一日平均二三二人、次の一一ヶ月は一七六人と減少しているが、戦争が次第に深刻になっていく中では仕方がないことであろう。平時の震災記念館と比較しても遜色がない入場者数であった。

表3　市民博物館入場者数

年月	日数	有料（人）	無料（人）	計（人）	1日平均（人）	観覧料計（円）
1942. 9	29	23,282	4,972	28,254	974	859.81
1942.10	30	6,480	2,549	9,029	301	250.83
1942.11	29	5,084	4,821	9,905	341	189.73
1942. 9～1942.11	88	34,846	12,342	47,188	536	1,300.37
1942.12～1943.11	334	56,760	20,562	77,322	232	2,363.17
1943.12～1944.10	302	36,449	16,629	53,078	176	1,493.30

出典：『横浜市事務報告書』各年。

次に職員を見ると、開館時には館長、書記二、嘱託三、他に守衛二、使丁三、看守人五であった。館長は嘱託で、図書館長の鵜沢忠が震災記念館から引き続いて兼務していた。同年一一月頃には、開館したためか随時勤務の嘱託などが増加している（『横浜に震災記念館があった』・各課二七四、以下同じ）。一九四三年一月現在の職員録では、中道等が嘱託・館長心得とされている。この「心得」がいつ外れたのかは判然としないが、同年三月頃のようである（三月二〇日決裁「伺〔市民博物館評議会評議委員について〕」）。中道は、一八九二年宮城県生まれ、柳田国男・渋沢敬三らの知遇を得、東北において歴史・民俗等を研究、一九二六年東京で出版社を興し、三五年川崎市史編纂嘱託、四〇年『神奈川文化』編集委員であった（『神奈川県史』別編一、人物）。書記は茨木彦蔵・鈴木重孝の二人で、確認できる四四年四月・七月も同様である。嘱託は森良助・福田金太郎の二人で、福田は四四年四、七月にも嘱託である（七月には他に松岡虎夫）。随時勤務の嘱託は職員録には掲載されないので、この他にも嘱託がいた。四四年七月には、その他に守衛一、使丁一、看守人七、雑役婦一が確認できる。

また、四三年三月「博物館運営ノ完璧ヲ期ス」ために、従来の横浜史料調査委員会を改変し横浜市市民博物館評議員会が誕生した。市長、助役が会長、副会長、所管課長等の市幹部や学識経験者などにより構成された。

五、おわりに

横浜市市民博物館は、一九四四年一一月に観覧事業を休止した。これは、空襲に備えるために市役所等が移転したためであった。既に同年八月二三～三一日「本庁舎移転ニ伴フ市民博物館陳列場整理明渡シノタメ」に臨時休館をしていた（八月二四日決裁「市民博物館臨時休館ニ関スル件」、各課二七四）。一〇月には市庁舎が老松国民学校等に移転し、市民博物館へは市民部の一部が移転してきた。翌四五年三月には、市会の議場等が移転してきた。これは、本土防衛のために新設された横浜地区司令部が横浜聯隊区司令部の建物に入ったため、聯隊区司令部が図書館に移り、図書館にいた市会が押し出されたためであった（以上、『横浜市会史』第五巻）。また、この前後から一部を陸軍が使用した。これらにより、「陳列品は地下室へ投げこまれ、館内は小室に分割改装され」てしまった（『横浜経済・文化事典』）。

同四月には、館内に「戦時生活調査部」が設置され、五月の横浜大空襲後には「戦災地戦力化横浜本部」が設置され、中道等が常務理事として「戦災地戦力化の指導に乗り出した」と報じられた（『朝日』六月六日）。七月には、昭和一九年度限りで「横浜市市民博物館観覧料条例」の廃止が決定し、開館の根拠条例が廃止となった。敗戦後は「生活科学指導部」が設置されたが（四六年九月刊の職員録では、生活指導科学所〔生活科学指導所〕となっており、中道が所長）、上陸してきた米軍に接収されてしまう（四五年一一月現在の資料では、九月一～四日、一五～二六日）。

このような戦争末期から敗戦直後の混乱の中で、所蔵資料の散佚があり、後の返還作業においては様々な問題を生じさせた。そして、その解決は一九五〇年代後半となった。

（百瀬敏夫）